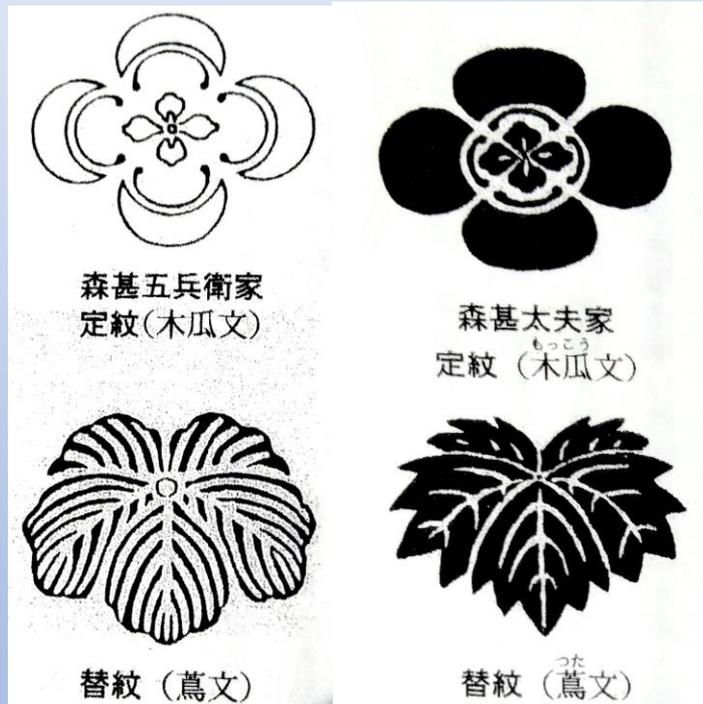


# 森水軍の成り立ちと その活躍



令和6年2月16日

徳島学博士 徳島城博物館ボランティアガイド

坪内 強

# 森水軍とは

- (阿州奇事雑話 (横井希純) より)
- **森氏**の祖先は当国の撫養**土佐泊浦**に住しその辺を領す。
- 足利公御治世の末には土佐泊の**松江の小城**に住し家人も多し。
- 尤も**森甚五兵衛**、同**甚太夫**、同森**志摩守**と共に住し海辺に住せる家にて代々船法水戦の妙を得水手を鍛錬し**船を操る**こと飛ぶが如し。
- 又**水中の術**に委し。
- 天正の頃より御当家(蜂須賀家)へ随順し御船手の将たり。
- その後文禄年間に朝鮮御征伐の節釜山海その外所々の水戦に船手の軍功甚だ高し。

# 南北朝時代の阿波水軍

- **南北朝時代**、朝廷は約六十年間南朝と北朝に分かれて激しく争った。**鳴門**から**阿南市**の**東部海岸**は**南朝方**が勢力を振った。
- **伊島**には**小笠原刑部**、**淡路沼島**には**小笠原美濃**がいて南朝方に尽くした。
- 共に阿波一宮城主**小笠原氏(一宮氏)**の一族である。
- 平安時代以降、関門海峡から紀伊水道にかけては**海賊**が武力をもって瀬戸内海を航行する船から、「**通行税**」を徴収していた。
- 紀伊、**淡路**海域は紀州の**熊野水軍**、**鳴門**は**四宮水軍**の影響下にあった。  
(阿波水軍 伊島と沼島 湯浅良幸)
- **四宮氏**は、**小笠原刑部**及び**小笠原美濃**の家臣で海賊であったのかもしれない。
- **因幡**からやってきた**森氏**は、**四宮氏**と**縁戚**を持ち水軍としての基礎を確立していったのではないかと推測される。

# 森氏の先祖は海賊？

- 森氏の先祖は、足利時代末期から鳴門の土佐泊に住んで、当時**倭寇**として八幡大菩薩の旗じるしを掲げて南支那海方面に活躍し勇名をとどろかせた。
- また鳴門海峡の要衝の地を扼して、この地を通行する商船から**関銭**を徴集し、応諾した船舶は**護衛**して無事目的地に送りどけ、然からざる船舶は積荷を**掠奪**した。
- 所謂世間という**海賊**であった。
- 海賊はやがて水軍と名称を変えた。

(郷土研究発表会紀要第23号 森甚一郎)

- 「権力の制定した法律に従わない海上での盗賊を**海賊**」
- 「権力の下で海の軍事力として使われるようになれば**水軍**」
- **土佐泊**付近は、古くから**海賊**の活動が盛んであったことが、紀貫之の「土佐日記」・朝鮮の「海島諸国記」等から知られている

# 森家の出自（木瓜の香り）

- 森家ハ往昔ハ**藤原**姓。
- **藤原鎌足**俵（**田原**）藤太秀郷ノ系統ヨリ出ヅ、ノチ**鎌田氏**ヲ名乗り、数代武門トシテ武功ヲ顕ストイヘドモ、**累世伝来ハ不詳**。
- 家紋ハ中古ヨリ**木瓜**(モッコウ)ヲ用ユ
- 遠祖については詳らかでないただ、家祖の鎌田(のち佐田) 九郎兵衛については、**因幡国**ニ住居シ、鎌田九郎左衛門ト称ス。**軍術武功**ノ覚エ有リ。
- 阿波国屋形細川家ノ老臣**森飛驒守(切幡城主)**・**久米安芸守(芝原城主)**兩人ノ取次ニテ阿州ニ来ル。
- 細川家ニ属シ、鎌田筑後守ト称シ、阿州名東郡**西黒田村**ニ住ス。
- 徳島市国府町西黒田に小祠があり、土地の人は「**島殿さん**」と呼んで崇敬している。ここがかつての鎌田九郎左衛門の居館跡か。

# 鎌田筑後守

- 九郎左衛門は**鎌田筑後守**を名乗り名東郡西黒田村(徳島市 国府町)にして、三十八貫を領し決断役を勤めた。
- 住吉(板野郡)の神主と在所の百姓が裁判で争ったとき、筑後守は百姓に勝訴を与えた。
- ところが神社が裁決を不服とし室町幕府へ上訴、判決は逆転して百姓の敗訴となった。
- 筑後守は私曲があったとして**所領を没収**せられた。
- このあと筑後守は佐田九郎兵衛と改称して**板野郡沖ノ原**(鳴門市 大津町**段関**)へ移って蟄居した。
- 沖ノ原は「このあたりまで海が入りこみ、勝瑞城と土佐伯城を結ぶ軍事上の要害の地」であった。

- 九郎兵衛は失脚後段関で浪人していたが、水軍の実績を買われ**松永久秀**につかえた。
- しかし、不和となり、その後段関へ帰りのち病死した。
- 九郎兵衛には**元村**・**吉村**二子があった。
- 九郎兵衛は阿波入国に際し世話になった森飛騨守の氏称を請い受け森氏へ改称し、長男**元村**に**森志摩守**を名乗らせた。
- 二男**吉村**は善左衛門と称し、**長左衛門家**で船手頭を努めた。
- 森氏は阿波に来てから短期間に鎌田姓・佐田姓・森姓と再三姓を変えている。

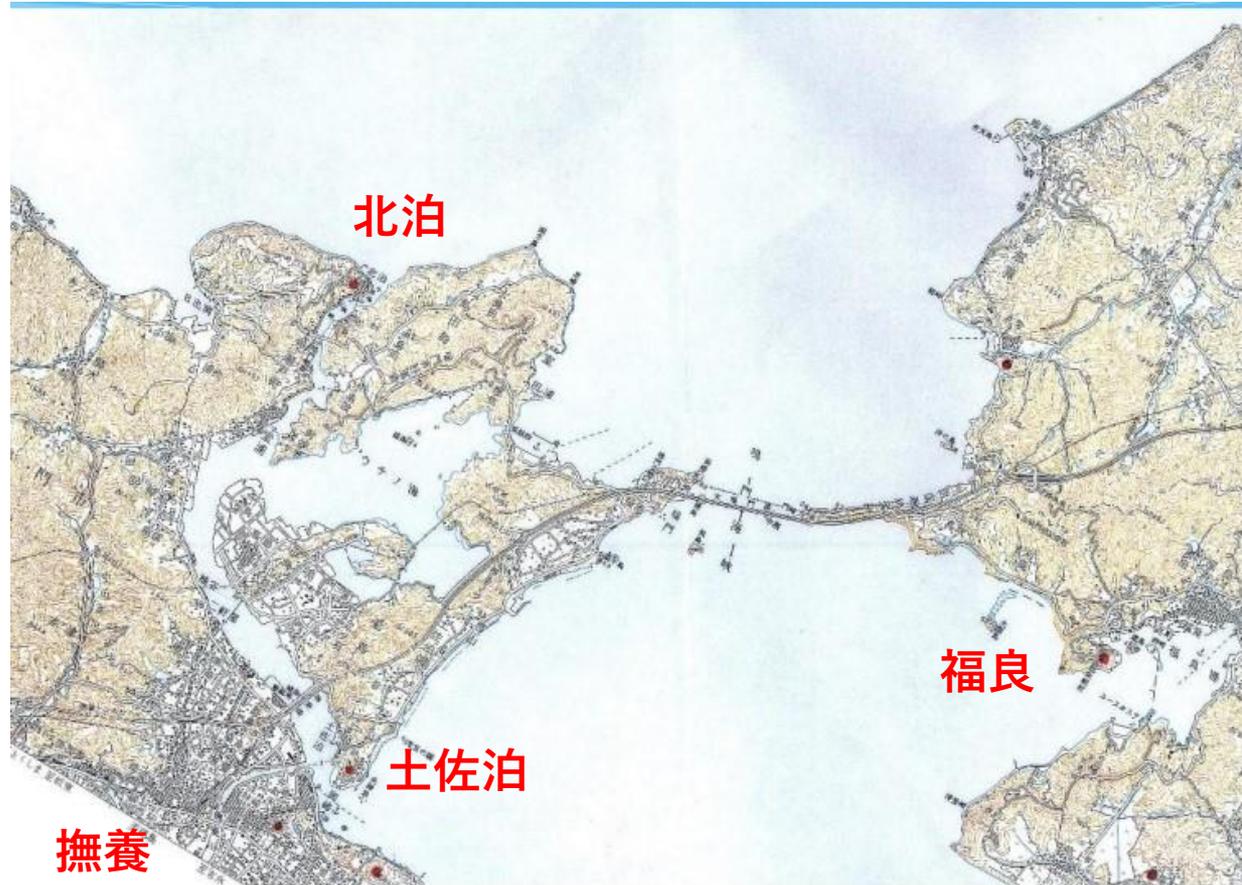
# 戦国時代の因幡 伯耆



# いつ何処から来たか

- 佐田(鎌田)氏が細川氏に仕え始めた**時期は定かではない**。
- **なぜ**因幡からやって来て細川家に仕えたのかも不明だ。
- 1510年代から因幡守護**山名氏**の内紛や出雲**尼子氏**の伯耆・因幡への勢力伸張の争いが生じた。
- 大永4（1524）年に尼子経久が大軍を率いて伯耆へ攻め込んだ「**大永の五月崩れ**」が遠因となったのかもしれない。
- 天文8年（1539年）に三好実休と共に細川持隆に従い伊予の**河野氏**と戦った際には、**水軍を率いて**戦功をたてている。
- それより前だったのは間違いない。
- 子の元村が撫養城主小笠原将監の娘を娶り、孫の**村春が1542年に生まれた**ことから1520年頃ではないだろうか。

# 鳴門淡路図



土佐泊は昔土佐と京都との行き帰りの船が寄港していたので土佐の泊の名がついたと伝えられている

# 森氏家系

## •始祖：**佐田九郎兵衛**

因幡国出身。細川氏に仕え、阿波佐田館（現在の徳島市国府町西黒田・国府町東黒田）三十八貫を領した。後に三好氏に仕えた。土佐泊城主。後に森に改名。佐田神社に祭られている。

## 1.元村

志摩守、筑後守。板東郡**段関城**及び**土佐泊城**城主。

妻は、撫養城の小笠原摂津守の娘。

三好氏に仕えた。

天文**16年（1547年）**子の村春に志摩守を名乗らせ、元村は筑前守を名乗り段関に隠居。

**長宗我部元親**の阿波侵入に抵抗、土佐泊城を守り、降伏しなかった。

天正**13年（1585年）**蜂須賀家政の阿波入国により、国実村（石井町）において隠居料**100石**を賜り、剃髪して九華と称した。文禄**3年（1594年）**6月5日病没。

## 2.村春

志摩守。天文11年（1542年）出生。天正13年（1585年）**豊臣秀吉の四国攻め**に際し、木津城（鳴門市）及び岩倉城（美馬市）攻略の功により、秀吉から四国平定後3,000石を与える約束の**朱印状**を受ける。

のちに蜂須賀家政もこの朱印状に拘束された。

天正14年福井庄**椿泊**を本拠として、福井庄に2,525石、他の5村で500石、計3,026石余を与えられた。

文禄元年（1592年）秀吉の朝鮮出兵に水軍を率い朝鮮水軍と戦う。熊川一番乗り。

6月2日**唐島水道**の海戦（唐浦海戦）で**戦死**。享年51。  
其の墓は道明寺にあり臨終の形相を刻している。

## 3.忠村

志摩守。天正6年(1578年)出生。文禄元年相続。石高2,826石。

村春の子。父戦死の訃報を聞き、**15歳**で**朝鮮出兵**。

唐島での戦功により家政から刀を与えられた。

慶長15年（**1610年**）7月10日没。享年33。**子なき**により、家が**断絶**した。善海様と呼ばれている。

#### 4.村重（森甚五兵衛家の始まり）

- **村春の弟の村吉の長子**。2代目**村春の養子**であったが、1578年3代目忠村が生まれたので、**分家**して**森甚五兵衛**と称した。
- 分家に当たり、蜂須賀家政より、500石を分知され**津田村**に移った。
- 文禄元年（1592年）**朝鮮出兵**には戦功があり、徳川家康は特に戦功を称え、呉服を授け、114石の加増を受けた。
  
- 慶長14年（1614年）**大坂の陣**の戦功で、藩主蜂須賀至鎮から730石の加増と感状を与えられ、森甚太夫共々徳川家康と徳川秀忠から感状を授与された。
  
- 元和2(1616)年志摩守家を**相続**。
- **津田村から椿泊へ**
  
- 寛永12年（1625年）徳島藩では参勤交代の必要のため、森甚五兵衛家とその分家の森甚太夫家とともに、藩の**海上方**として造船、管理、運用、乗船の訓練を司り、明治維新まで阿波水軍の地位を世襲した。
- 寛永14年7月29日没。享年72。

## 5.村純 志摩守

元和元年（1615年）召出 召出高300石 石高2,413石。

元和5年（1619年）**福島正則**改易に当たり、父の村重に従い、12歳で芸州広島へ出陣した。

父村重が没し家督相続して**志摩守**と称した。寛永14年（1637年）**島原の乱**に従軍した。寛文5年（1665年）8月15日病没した。

## 6.村安

寛文5年相続。石高2,413石。幕府巡見使通行につき紀州勝浦より土佐甲浦まで輸送した。延宝7年（1679年）幕府目付の来藩に際し、大坂まで迎えに出る。宝永3年（1706年）3月10日没

## 7.村建

元禄14年(1701年) 召出 召出高300石 宝永3年相続 石高2,413石。  
森甚五郎を森甚五兵衛と改める。

宝永7年(1710年) 巡見使通行につき、淡路由良浦から大坂まで送り届けた。

享保9年（1724年）より病にかかり、病氣中、森甚太夫が主として海上方を勤めた。享保17年（1732年）閏5月7日没。

## 8.村冬 志摩守

正徳6年(1716年)相続

# 森氏と土佐泊城

- 細川氏初期時代は、秋月城を中心とする阿波の山岳地帯に中心があったが、やがて勝瑞城など沿岸地域に政治の中心が移ると、名東郡**黒田**に本拠を置いていた森元村は、主家に従い、海に面した**土佐泊**へ本拠を移した。
- **讃岐諸将**が伊予**河野氏**と呼応し**阿波侵攻**の報せを受けると、**元村**は土佐泊城に、**四宮和泉守**は北泊城に配され守りを固めるとともに元村は引田の**寒川氏**を攻め勝利したという。
- また天文八年（1539年）に三好実休と共に細川持隆に従い伊予の**河野氏**と戦った際には、**水軍を率いて**戦功をたてている。〔予陽本〕
- 天文16年（1547年）に、子の**森村春**に**志摩守**を名乗らせて、森元村は**筑前守**となって、板東郡沖野原（鳴門市大津町）**段関**に隠居し兵力を蓄える。

# 森氏系図

森氏家系図

佐田 九郎左衛門

鎌田筑後守

松永久秀に兵法を教授するも、不和になり阿波に戻った。

元村弟

森善左衛門 吉村

森筑後守 元村

段関城主  
土佐泊城主

100石

文禄3(1594)年没 志摩守

長左衛門家 船手頭 300石  
梶郎家

天正13(1585)年召出

天正14年、**椿泊**に移る。3026石

仙石秀久に招かれ家臣になる。  
元村3男

**由良**

600石

安太夫

七郎太夫恒村

九左衛門

森志摩守 村春

仙石筑後守村吉

森新正 氏村

土佐泊

福良

**椿泊**

小諸

信州

安之丞村治

長左衛門之村

天正20(1592)年朝鮮討死

森志摩守 忠村

村明

1000石

**由良**

文禄5年(1596)相続

長左衛門村冬

長左衛門慶村

森甚五兵衛村重

森(仙石)権平久村

森甚太夫 氏純

元和(1616)年相続 朝鮮、大坂御陣

森権平

朝鮮御陣 晋州城一番乗り

津田村から椿泊へ 広島城請取

引田の戦いで没1583年

朝鮮御陣 大坂御陣 由良補佐

寛永14年没 慶長14年(1614年) 家康より、感状

森権平庵。足腰の神様

家康より、感状

# 森一族の鳴門、淡路支配

- 蜂須賀氏入国後、**志摩守**、**甚五兵衛**、**甚太夫**は**椿泊**へと移転。
- しかし、**元村の弟**、森善左衛門**吉村**の子の**安太夫**や**恒村**は**土佐泊**に留まった。
- そして、蜂須賀氏が淡路拝領後、**甚太夫**が**由良城代**として配置される。
- **恒村**の子孫は**長左衛門**を名乗り、**福良**支配から**由良**番手・**洲本**支配へと淡路の蜂須賀水軍の一翼を担う。

# 森一族勢力図



# 通婚策による勢力拡大

- 元村の妻は撫養城主 小笠原摂津守将監(初代撫養城主)の娘。
- 元村の妹三人はそれぞれ、撫養城主小笠原将監、撫養の四宮壹岐守や北泊の助太夫へ嫁いでいる。森氏と小笠原氏、四宮氏の関わりは深い。
- 村春の妹たちも引田城主四宮光武の弟四宮光利、撫養の八右衛門正長(森甚六祖)へ嫁ぐ。
- 村春の妻は板東対馬守(三好長逸家臣)の娘、弟村吉の妻は赤沢伊豆守(板西城主)の娘である。
- また、弟の村吉は淡路の仙石久秀の家臣となり、息子の権六を仙石氏の養子として繋がりを深めた。
- 次の弟、新正氏村は森甚太夫家の祖であるが、島田信濃守の娘を嫁として甚太夫を生んでいる。
- 撫養周辺の土豪、水軍の将と積極的に通婚策をとりその結果、水軍としての森氏の勢力を強固にしていたものと思われる。

# 三好氏と森水軍

- 森水軍の初代長は、森元村
- **元村**は、戦国時代に畿内まで勢力を伸ばした、**三好長慶**に阿波と畿内を隔てる海路を繋ぐという重要な役割を与えられる。
- 三好家が畿内で勢力を拡大できた背景に、**森一族**という**水軍衆**の貢献は絶大であった。
- しかし、**義賢(実休)**が畿内へ武器の調達へ赴いた際に、阿波への帰途で、敵対する畠山氏と海上戦となり、大将である義賢が**戦死**するという痛手を負う。
- **長慶亡きあと**、弱体化した三好家から阿波、そして四国そのものを支配しようと台頭してきたのが、**長宗我部元親**。
- 信長死後、1582年に、長宗我部元親が**阿波に侵攻**した際、阿波と讃岐の多くの城は長宗我部勢に降伏などし、撫養城には長宗我部の家臣真下飛騨守が入ったが、**土佐泊城**は**陥落**しなかった。

# 三好長治と森村春

- 1577年3月初旬、**三好長治**は、荒田野の戦いで細川真之を攻めるが、後背を義叔父の一宮成助に襲われるやいなや、その軍勢はあっというまに壊滅(荒田野の戦い)。
- 三好長治は**今切城**(城主篠原長秀)に逃げ、**淡路**の弟、**安宅神五郎**に救いを求めようとは**森村春**に**救援**を依頼。
- しかし、吉野川の支流は数多く、**三好長治**は**助任川**で救援を待つて居たのに対し、**森村春**が主君を探していたのは**佐古川**という運命の皮肉がそこに待ち受けていた。
- 淡路へ逃げる頼みの綱だった森水軍はとうとう、迷子の主君を見つけないことが出来なかった。
- 三好長治一党は敵軍の追撃を逃れながら**別宮長原**まで逃げるが、そこで自害する。

# 中富川の戦い

- 阿波三好氏は長治の死によって絶えるが、一族である**十河存保**を盟主に迎え、存保は織田信長の支援をとりつけ長曾我部元親と対決しようとした。
- しかし、**信長**は**本能寺**の変(1582)で急死してしまう。
- その2ヶ月後、**中富川の決戦**が行われ、**阿波三好党は壊滅**した。
- 勝瑞城に立てこもった十河存保を長曾我部の軍が包囲する。
- ちょうど台風が来襲したのか**吉野川平野は洪水**になり、家々は湖に浮いた島のようになった。
- それを待っていたかのように、**森志摩守**の水軍が現れ、勝瑞城に食料を運び入れるとともに、身動きのとれない**土佐軍を攻撃**した。結局**和議が成立**し、十河存保は勝瑞城を明け渡して讃岐に去った。
- 森村春は存保が讃岐に去った後も**豊臣秀吉**の援助を受けながら**土佐泊城**で孤軍奮闘した。

# 森家と仙石氏(権兵衛)

- 仙谷久秀は、天正9年（1581年）には黒田孝高らと淡路島に渡って**岩屋城・由良城**を陥落させた。
- 本能寺の変後、秀吉は柴田勝家との決戦に当たり、**仙谷秀久**を四国勢の抑えとし、急遽近江から淡路に出向させた。
- 手始めに高松頼邑が守る喜岡城を攻めたが、落とせずに撤退。次いで讃岐国引田に上陸、**引田城に入城**した。
- 天正11年（1583年）、長宗我部勢の香川信景らの部隊が押し寄せるも、秀久は伏兵で迎えうち、緒戦は優勢となる。
- しかし数で優位な香川隊に巻き返され、次いで駆けつけた長宗我部勢の援軍の攻撃により、引田城へ撤退。
- 翌22日に**引田城**は長宗我部軍の総攻撃を受け**落城**し、秀久は敗走する。

# 森村吉

- **森村吉**は、通称は石見、九郎左衛門。
- 後に仙石姓を与えられる。
- 森元村の次男であり、森村春の弟、森新正氏村(甚太夫の父)の兄。
- そして、**森甚五兵衛**と**森権平**、**森村明**の父である。
- 天正10年(1582年)、淡路を抑え森家を援助していた**仙石秀久**に招かれ**家臣**になる。
- 織田家（羽柴家）への人質として息子の森権平らを引き渡し、一族の居城土佐泊城に仙谷久秀らを招き入れる。
- 天正11年（1583年）の引田の戦いでは緒戦の勝利に貢献した。
- 四国攻めの後も秀久に従い、秀久が**信濃小諸**を拝領後は**家老**として7,000石を与えられた。
- **三男・村明**の系統は代々仙石家に仕えている。

# 森権平

- 森（仙石）久村（1566年－1583年）
- 森（仙石）村吉の次男。
- 森村重(森甚五兵衛)の弟。
- **森権平**の通り名で知られる。
- **仙石秀久**との盟約で**人質**に出された際、秀久に寵愛され仙石の姓と久の一字を賜った。
- 1583年4月21日、**引田の戦い**で仙石軍は長宗我部元親軍に緒戦で勝利して追撃するが、敵の反撃を受けて敗走。
- その際に**権平が殿**を務め稲吉新蔵人と激戦になったが、**深田に馬の足を取られた**上敵に包囲され**戦死**した。享年18歳。
- 死後、地元の人々から**足の神様**として祀られている。

# 森権平の墓

もののふの 二度の懸(か)けして  
権平は  
陣の引田に 名のみのかしつ



森権平庵



森権平のお墓

# 秀吉に依る四国攻め

- **羽柴秀長**率いる軍勢3万は堺から船出し、**海路洲本**に至る。
- **羽柴秀次**率いる兵3万は**明石**から**淡路**へ渡り、両軍は**福良**で**合流**して阿波の土佐泊へ上陸した。
- **宇喜多秀家**の兵に加えて**播磨**から**蜂須賀正勝**・**黒田孝高**、さらに**仙石秀久**が**屋島**に上陸し、**大阪峠**を越えて**秀長と合流する**。
- **秀長**の軍は阿波上陸後、まず**木津城**を攻撃した。圧倒的な兵力の差に城将の東条関兵衛は**開城した**。
- 関兵衛は土佐へ退き、立腹した元親によって切腹させられた。
- **牛岐城**の香宗我部親泰、**渭山城**の吉田康俊は、木津落城を聞いて**城を捨てて**逃れ、残る拠点は一宮・**岩倉**・**脇**の三城のみとなる。
- **一宮城兵**は**善戦**したが、蜂須賀**正勝**等5万の秀長勢に兵糧や、水の手を断たれて終には**開城**した。
- **脇**・**岩倉城**も**秀次**・黒田・蜂須賀勢らによって陥落し**長宗我部元親**は**降伏**した。

# 秀吉の四国攻めと森水軍

- **森村春**は、1585年、豊臣秀吉の四国征伐の際に、**豊臣勢に参加**して阿波・木津城と、岩倉城攻めにて戦功を挙げる。
- 其の際に西国の船主たちが秀吉に「阿波の土佐泊浦の**森某**が**海賊**行為をして、甚だ「迷惑」と訴え出た。
- 秀吉から「海賊行為は甚だ不届け、申訳なければ厳科に処すべし」との言葉があった。
- **村春**は「**家来百人**を召し抱え**養う方便**として通船の荷物を時々追捕している。全く私腹を肥やすためではない」と申し上げた。秀吉は「向後無理な振舞は慎しめ。」と**主従百一人分の扶持**を下さった。
- さらに「**長宗我部氏攻略の策**は如何に」の下問に対してその計略を進言したので、黄金と太刀を賜い、その上、四国平定の後、忠勤を掴んでれば**三千石**を与えるとの**朱印状**を賜わった。

• (木瓜の香り)

- 天正13年（1585）蜂須賀家政が阿波に入国して初代の藩主となったが、家政は土着の豪族を優遇せずに専ら尾張や播磨の出身者を重用した。
- ただ森一族のみはその例外であった。それは秀吉の**朱印状**と**船舶**を所持していたためである。
- **家政**が秀吉に阿波を拝領したお礼言上に**上阪**した時は、**森家の船を借用**したことが阿淡年表秘録に記されている。

家政公御礼のため大坂へ御渡海、**森志摩守手船を御借受け**御供仰せ付けらる。

この時、**志摩守**も秀吉公に御目見え仰せ付けられ、**誓約**の通り阿州表の首尾を合わせ候段感思召の旨上意あり、且つ先達下され候御朱印高**三千石**阿波守より申し受け候様仰せ出だされ御羽織下さる。

『阿淡年表秘録』

# 四宮氏

- 家政は3,026石の証文を与え、森一族を全部**椿泊**に移住させたが、これは森氏の強力な水上勢力を恐れて、隣国讃岐の**仙石氏との連がりを絶とう**にする家政の深謀があったとも言われている。

**森志摩守** 土州の押えとして南方へ遣わされ候間、土地見立て相望み候様仰せ付けられ、那東郡**福井庄四宮肥後守の居所**であった椿泊に住居を望んだので、望の通り仰せ付けらる。(椿村誌)

- **四宮氏**は本姓**諏訪氏**。
- 元阿波守護**小笠原氏**の**家臣**で、小笠原氏と共に**信州善光寺平**から阿波に来たと言われる。
- 南北朝の時代から細川氏や三好氏にも仕え、鳴門の林崎館主であった**四宮和泉守**は、三好家に3500石で仕えていた。
- **四宮右近光匡みつまさは**1504年に信濃からきて昼寝城主、讃岐・寒川家に仕え、引田城主になったとされている。

- 四宮和泉守の息子**四宮加賀守**は鳴門北泊や岡崎の城主であったとも言われている。
- 一族が本拠としていた**大瀧**畠は**四宮外記光武**、塩竈神社の由来から**橘**は**四宮加賀守**、**椿**には**四宮肥後守**、**福井**には**四宮石見守**がいた。
- **橘湾**、**椿泊湾**そして**撫養一円**を支配し、土佐から関西まで海賊として活躍するとともに、三好家の海上輸送にあたっていたと思われる。
- **四宮肥後守**の一族は**椿**に拠点を構え、野々島や舞子島を基点とし、紀淡海峡から海部灘にかけて海賊として活躍していた。
- **四宮加賀守**は1577年、**長曾我部軍**が侵攻した際「撫養館の戦い」で阿波海賊衆を率い、撫養城から水軍を指揮して、別宮で敵勢17～18名を討つが、額の右眉の上を負傷した。
- そして弟の四宮左近と共に、林崎に帰ると、一族で播磨の**龍野**に逃れて、**興一右エ門**と改名し蜂須賀正勝に仕えた。

- 1585年、蜂須賀家政に従い阿波国に復歸し、子孫が1636年、津乃峰に塩田を開き、その地を**長浜**と定めた。
- そして四宮加賀守は**塩竈神社**を建立した。
- 津乃峰町の産土神**四宮神社**には、**四宮加賀守**が祀られており、その由緒書きに**撫養城主**は四宮加賀守であったと言う記述がある。
- 四宮氏の本家である**四宮右近光匡**みつまさ(引田城主)の後裔である**四宮外記光武**が引田城を追われた後、**大瀧城**の城主になった。
- **光武**は1582年、「中富川の戦い」で十河存保に従い長宗我部元親勢と戦い討死した
- 他の四宮一族も多くが長宗我部との戦いで命を落としたり、傘下になっている。
- **椿城主**の**四宮肥後守**は、東條関兵衛・牟岐右京允・仁宇但馬守らと共に中富川の戦いで長宗我部方で参戦し、戦果を上げたとも言われているが、その後は不明。(南海治乱記、元親記)

# 四宮神社由緒

- 記由緒  
慕しく推みるに當地の産土の神、**四宮神社**と崇敬し奉るは**四宮加賀守**典一右エ門様の御霊を祀り奉る。御宮にして**加賀守**は元龜天正時代勝瑞城主**三好長治の臣下**にして元來水師として南海面に活動したりし**撫養城主**なり(3500石)。
- 天正5年(1577)**長曾我部元親**阿波の国に攻入るや、主君三好長治公救援の為め、兵船を出して別宮にて敵勢17,8名を四角八方に切捨てたりしが加賀守は額の右眉の上を負傷し弟左近と共に先づは林崎に帰りたり。
- 其後一族とともに生国**播磨国龍野**に兵乱を避けて龍野にて興一右エ門と改名仕る。
- 其後時の至れるを待つ程に播磨国龍野城主**蜂須賀正勝**公愈阿波国に封じられるや従来りて一族と共に**撫養を経て津乃峰山**の中腹陣が丸にて7日の断食をしたり。其の後眼下の**海辺**を一族と共に**開拓**の鋤を下す

# 伊島

- **伊島**は、**南海道**が**官道**とされた8世紀以降、重要な地になっていたと思われる。
- 官道というのは、地方の**税金**を中央に運ぶためのものであり、当然のこととして、それを襲う**海賊**が発生した。
- 伊島は、地理的に和歌山県・日ノ岬に相對して、**紀伊水道**の**第一関門**となっている。
- 放置すれば、**海賊の格好の根城**になったはずであり、朝廷は一定の水上戦力をこの地に滞在させたと考えられる。
- 中世の「**古城記**」には、**伊島城**があって、主将は**小笠原刑部**亮となっている。
- 江戸時代は、森氏が歴代支配していて観音堂には供養塔が寄進されている。

# 海賊から水軍へ

- **豊臣秀吉政権下**で、刀狩り（かたながり）と同年の1588（天正16）年、「**海賊禁止令**」が出される。これにより海賊衆に生き方の選択が迫られた。
- ①豊臣政権の**大名の家臣**となる  
②武装を放棄し、**百姓**になる
- これは刀狩りと同じく、豊臣政権への反抗心を削ぐためのもので、**海賊衆の一揆を阻止**するのが目的であった。
- それまで海賊がが生活の糧としていた、海の**通行税の徴収**も**廃止**となった。海賊衆もお手上げで、村上水軍をはじめ日本の海賊たちは姿を消していった。
- **森氏**は、①の豊臣政権の大名**蜂須賀氏の家臣**となる道を選び阿波水軍となったと思われる。

# 野々島城址

- **野々島**には四宮肥後守(加賀守かも)が改築したと言われる**野々島城**があって**甚五兵衛**が更に改築して使用していたとの話も残っている。
- 元の城は平安時代末期から鎌倉時代初期のものといえる。
- この頃、紀淡海峡から海部灘にかけて出沒したといわれる**海賊の拠点**であったと思われる。



野々島城址

(1936年・作図：田所眉東・  
「阿波新田氏」)

昭和十一年二月十七日  
田所眉東



# 九州征伐

- 天正15年3月 **秀吉**は**島津義久**征伐の軍を起し、羽柴**秀長**をして**蜂須賀家政**・**長曾我部元親**・**黒田孝高**・**小早川隆景**らの諸将を率いて自ら筑前・筑後を経て肥後に進んだ。
- 蜂須賀**家政**は**兵六千人**を率いて豊後に入り諸将とともに島津家久義を府内城に攻めて走らせ、家臣**森村重**(甚五兵衛)・**森氏村**(甚太夫)・**森村春**(志摩守)らは敵船を奪った。
- 進んで日向に入り**高鍋城**を攻めてこれを抜いた。
- 家臣**武市信昆**(常三)は**黒田長政**とともに策をめぐらし敵を城外にさそい出して討った。
- 5月秀吉の軍が鹿児島に迫ろうとしたのでついに**島津義久**は**降伏**した。

# 小田原攻め

- 天正18年(1590)3月**秀吉**は**北条氏政**征伐の軍を起し、織田**信雄**をして伊豆に向わしめた。
- 蜂須賀**家政**は蒲生氏郷・福島正則らと信雄に属して北条氏規(氏康の子。氏政の弟。)の守る**伊豆の韮山城**を攻めた。
- 信雄・氏郷らはのちに引き上げて小田原包囲に従い、家政・正則らが残ってこれを包囲していた。
- この時四国・九州の兵艦は下田港に入った。
- その近くの**下田城**(守将は北条氏の将清水上野介)を攻めるに当たり、家政の臣**森村重**(甚五兵衛)は先登してこれを抜いた。
- 七月ついに北条氏は滅んだ。
- この戦いで、**森村吉**(森村重の父)は仙石久秀の元で大戦果を上げた。その後、村吉は、仙石氏が小諸に所領を与えられた時、7000石の筆頭家老となっている。

# 阿波水軍と朝鮮の役

- 天正18年 小田原に**北条氏**を**滅ぼした豊臣秀吉**はもはや国内には征服すべき者がなくなったので、その武威を海外に示さんとの大志を固めた。
- しかし、水軍の準備が充分ではなかった。
- 朝鮮の役の不成功の最大原因は**水軍の不振**であったと言われている。
- 翌19年に始めて**軍船建造**に着手し、しかも**水戦の訓練を行わなかった**ことは水軍下振の重大な一因をなした。
- また水軍にはこれを統轄する**総指揮官がなく**、ために数度の海戦に一致協力の実を失った。
- 藤堂と加藤・脇坂の争いなど**抜けがけ**の功名をこととし、功名争いを繰返したことは水軍敗戦の重大な素因ともなった。

# 文禄の役

- **文禄の役**に蜂須賀**家政**は福島正則・戸田勝隆・長曾我部元親・生駒親正・来島通之・同通総とともに**第五軍**の将として**7,200**余人を率いて出征した。
- **家政**は**稲田**左馬允植元，**中村**右近大夫重友，**林**凶書助能勝，**岩田**七左衛門光長等の重臣を従え名護屋から壱岐を経て**釜山**へと向った。
- 古伝記には「**家政公御召船無**之故**森志摩守村春**が所持する**鈴船**にて御渡海云々」となっている。
- 六月蜂須賀家水軍の将**森村春**（志摩守）は**唐島**に戦って敵船を奪い、**奮戦して戦死**した。李舜臣（イ・スンシン唐浦の海戦）
- 十二月**森村重**（甚五兵衛）は加藤嘉明らとともに**唐島**および**釜山**の敵船を**撃退**した。



- **水軍の本務**は**陸軍の輸送**であり戦鬪は副務とみられていたが幸に阿波水軍は**独立水軍**として、脇坂安治，加藤嘉明，九鬼嘉隆等の船方衆と相互援助の下に直接戦鬪に参加する機会に恵まれていた。
- **順天の海戦**では**森甚五兵衛村重**の率いる阿波水軍が敵の石火矢にて船を焼かれ苦戦している**毛利軍を助けて大勝**を得ている。
- 更に6月の**晋州城**攻略戦では、**森新正氏村の一番乗り**など水陸両軍全力を尽しての攻撃の末6月28日**晋州城**を屠った。
- 文禄4年（1595）唐島で**森志摩守忠村**（村春嫡男）は敵の軍船を追払い**敵兵を討取った**ので後に家政はその功を賞して刀を与えている。
- 明けて文禄5年（慶長元年，1596）交代守備を命ぜられた**森新正氏村**（甚大夫家の始祖）は7月1日**航海中に釜山の沖で没**している。
- 俗名森新正氏村高麗開陣之後病而終焉葬于釜山海了文禄五丙申七月朔日（地藏寺 氏村の墓銘）

# 慶長の役

- **慶長の役**に蜂須賀**家政**は**生駒**一政・**脇坂**安治とともに**第七軍**に将として朝鮮に至り、昌原に屯した。
- 慶長2年(1597)7月 朱元均の率いる朝鮮の水軍を**開山島**付近の海洋に破り、さらに**加徳島**に追撃した。
- このとき家政の水軍も参加してすこぶる武功があり、**森村重**(甚五兵衛)は、**敵船30艘を捕獲**した。
- 今度朝鮮為使相越、**島津**殿、**立花**殿、**船合戦之刻行合**、無比類働、深重聞届候、然間為褒美**脇指**一井領知百石、内那西郡**大野村**之内**卅七石余**、百姓一人、那東郡**新庄村**之内**貳拾七石**、同郡**荒田野村**之内五百百姓壹人、**合百拾七石**遺之条、全令所務之状如件、
- 「慶長三年」 十二月十三日 **蓬庵** 一茂 在判
- **森甚五兵衛**とのへ 小杉楡邨「阿波国徴古抄雜」

- 八月 **家政**は小西行長・島津義弘・長曾我部元親・生駒一政らとともに宇喜多秀家に属して明将榎元の守る**南原**に向った。
- 家政はまず敵将・白土森の守る**黄石山**の敵を破り、諸将とともに正面から**南原城**に肉薄した。
- 小西行長・宇喜多秀家らは城の後から攻めた。
- 十二月 明将が**浅野長政**らの守る**蔚山城(ウルサンソン)**を囲んだ。
- **加藤清正**はその報を聞き直ちに城に入って共に守した。明軍は清正の威名を恐れてみだりに攻めず長囲の策を採り道を絶って城を陥れようとした。
- 城が出来上がっておらず城中食が乏しく城兵は大層苦戦したが、慶長三年正月蜂須賀**家政**らの諸侯が**応援**に入り明軍を撃破した。
- **家政**は脇坂安治と四国の**兵二万**をもって城の付近に陣し明兵が敗走するのを**追撃**して大いに破った。

# 森氏と毛利家

- 又朝鮮にて**毛利家**も船戦し給ひしに**戦難儀**に及びたるに御当家の御船手**森氏は横合より兵戦を乗入れ加勢**し攻め立てしに朝鮮の兵戦散々になりて**毛利侯全勝**を得給ふ。
- 依て厚く当時の**謝礼**をなし給ひなお又御内々の仰せには時を経若しくは仔細等あつて**阿州を立ち退く杯のことあらば後代何時にても早々毛利家へ来らるべし**この報恩には厚く扶助をなさんとありし
- その頃より今に至るまで長州萩の御城下に**森甚五兵衛屋敷と云ふを修造**し**秋納米一千石を彼の屋敷の蔵**に納め積み毎年先繰りに米を詰め替へ囲ひ置き何時にても森氏の来るを待ち受けたと云ひ伝ふ。

# 大坂の陣

- 豊臣軍は**大坂城**周辺に**砦**を築き備えた。
- 大坂城南西の**木津川口**はそのいくつかある砦の一つだった。
- 1614年11月18日、徳川軍の蜂須賀**至鎮**はここを攻めるために**森村重**を**偵察**に派遣させた。森村重は「飯を炊く際に出る煙が少ないので、**兵数が少ない**と思われます」と報告。
- これを聞いた至鎮は、家康の本陣に行き、「敵は地形を頼りにして**兵力が少ない**ようです。そこで木津川口の砦を落としたい」と、**攻撃の許可**を求めた。
- これを聞いた徳川家康は「もし本当に簡単に落とせるのなら、大変結構である。ただ**単独ではなく、浅野長晟軍に搦手を、池田忠雄軍が遊撃を、蜂須賀軍が追手**として敵を攻めよ。
- 木津は人馬を動かすのに便利な場所ではないので、**三人で協力**して落とすように」と命じた。

- 蜂須賀軍は翌日、11月19日午前6時と決まっていたところを、3時に出発して**抜け駆けをし**兵3000を二つに分けて水陸から砦を攻撃した。
- 蜂須賀**水軍は40艘で木津川**を進み、途中で樋口雅兼の率いる5艘の**豊臣水軍**が攻撃してきたが**捕縛**している。
- 一方、陸路の方は砦の背後に回り、民家に火を放った後、水軍と協力して**挟み撃ち**にした。
- 豊臣軍は守将の**明石全登**が会議のために**不在**でおらず、一族の明石全延が守っていたために指揮が上手くいかず、蜂須賀軍の挟撃で大混乱に陥り、大した抵抗も出来ないまま**博労淵**に**撤退**してしまう。
- ちなみに出し抜かれた**浅野軍**はそれを知らず約束通りに6時に出発したが、途中で蜂須賀軍が抜け駆けしたことを知り、急いで川を渡ったために多数の**溺死者**を出している。

# 博労淵の砦

- 1614年11月28日、**石川忠総**は葦島に陣を置き、狗子島の陣所も兼任し、**浅野長晟**が後援についた。
- それを知った**蜂須賀軍**は**博労淵の対岸**に仕寄をつけ、先に攻略しようとして計画した。
- 11月29日、石川軍は葦島の州から博労淵に渡ろうとしたが満潮のために進むことが出来ず、砦の兵に銃撃され大損害を出した。
- 石川忠総は、九鬼守隆から船を三艘借りて狗子島の北から上陸。
- そして**蜂須賀軍**も船で**博労淵**に近づいた。
- この時、博労淵の砦の大將・**薄田兼相**は前夜から神崎の**娼婦の家**に泊まり込んでいて**留守**にしており、兵の士気がまったく上がらず、不意の攻撃もあって大混乱となった。
- そのため兵は砦を捨てて敗走し、あっさりと攻略されてしまった。

# 阿波の七感状



大坂の陣の後、感状を徳川家康 から七通、徳川秀忠からも七通受け取った。

この**感状**を受けたのは、蜂須賀至鎮の下で活躍をした稲田修理亮示、植田九郎兵衛植次、**森甚五兵衛、森甚大夫**等の七名でありこの時受け取った感状は「**阿波の七感状**」とも呼ばれている。

この箱は、参勤交代で藩主の陆行をする際、森甚五兵衛が拝領した感状を納め運んだ箱。森家の家紋、木瓜紋が配されている。

# 蜂須賀氏の登場と由良引け

- 大坂の陣の功により、蜂須賀至鎮に**淡路一国**が**加増**され、元和 2 年には筆頭家老の**稲田示植**たねしげが将軍の上意により**由良城代**として派遣される。
- その後**免職**となり脇城に戻る。
- **牛田一長入道宗樹**に由良城を預けてこれを**由良城番**とする。
- 元和 2 年 (1616) 6 月：牛田一長入道宗樹が亡くなる。
- 寛永 2 年 (1625) **森甚大夫、由良城番**になる
- 寛永 8 年 (1631) に) **稲田示植**、淡路国城代として**再来**する。
- 交通の便が悪く 淡路一国を治めるには非常に不便なため、幕府の許可を得て城と町を洲本に移す「**由良引け**」が、示植主導で行われる。
- 洲本は脇坂以来約四半世紀ぶりに淡路の都に復することになる。

# 森甚太夫の退去と判物

- **森甚五兵衛村重**は元和2年(1616) **中老に格付けられ**2400石が給され、代々船手頭 (**海上方**)」を務めた。
- **森甚太夫氏純**は大坂の陣で感状を戴いたが、**中老にもなれず**加給も少なかった。
- 蜂須賀至鎮死後、待遇をめぐる不満から 元和8年(1622) 阿波国を退去した。
- 3年後に**井伊直孝**の仲介により帰参し、森甚太夫家と同じく**中老**に格付けされ淡路国**由良**に赴任し、**海上随行役**を拝命し、**甚太夫家**は、**本家甚五兵衛家**と**同等の待遇**となった。
- 両家は高位に遇されたが**船頭**等の**支配**には関わらず、**安宅目付**がその役を務めた。
- **安宅目付け**は、船頭・水主・船大工等 船舶に至る迄、**水軍の全て**を**直接指揮監督**した。

# 由良の森甚太夫

由良には、由良城番だった森甚太夫の供養塔が残っている。



写真 3-8 森甚太夫供養塔



写真 3-9 由良心蓮寺山門（由良徳島藩邸の正門）

# 判形人

- 森志摩守**村春**には男子が無かったので甥の**村重**(弟村吉の嫡子)を**養子**として村春の長女栄輝院を配した。
- 所が後に**実子忠村**が出生したので 村重は村春の知行の内から五百石を分知してもらい**別家**して**甚五兵衛**と称した。
- **天正十三年**の冬、諸臣の配置がえで森一族は土佐の押えとして**椿泊**に移った。
- **家政**は、**水軍**として**森志摩守村春**を**椿泊**に移住させ、**橘湾**から**穴喰**までの海を支配させた。
- 藩主・家政は浦々の代官宛に
- 「**椿**より**海部**までの浦々にて、**森志摩**にれう(漁)仕候へと申付候間 **いづれ之浦へ行**共無意義れうさせ得候者也」(森家文書)
- との判物を出して、志摩守が漁をすることのお墨付きを与えた。

- 椿泊の東西に居を構えた志摩守家、甚五兵衛家、更に平松の甚太夫家は一族として仲もよかったが、志摩守忠村が妻(寺沢氏)を迎えてからは仲違いも起こるようになったと言われる。
- 慶長九年、甚五兵衛村重は分知の五百石を忠村に返上し、新たに家政公から新知八百石を賜い津田浦に移った。  
(陪臣から直臣となり、更に加増された)
- 家政公は水軍の実権者である森家の不和を心配されて、忠村に男子が無いので甚太夫氏純の子、左平(氏純の妻は村重娘)を養子としたが、不幸にも早世した。
- 慶長15年7月10日、志摩守忠村が三十三才で病死して相続人がないので志摩守家は断絶した。

# 森一族居住地



- 慶長15年(1610)に、分家していた**村重**の「**預かり**」として家名は存続することになるが、**忠村の家来**たちは**失職**した。

**忠村**は死の直前に蜂須賀至鎮に**家臣**たちのことを願い出ており、次のようなお墨付き(**判形**)が与えられた。

「志摩家来之者 泊に可致堪忍之由尤候 なお其浦 漁獵併せて商売仕儀は浦之商人なみたるへく候 其外諸役可令免許事 己上」

**志摩守家の家来5人**(森長左衛門、森七兵衛、森清左衛門、岡喜之助、忠津莊右衛門)は、それぞれ**百石で津田の甚五兵衛家の与力**となり、その外の家来**43人**は**椿泊**にあつて散乱しないようにと至鎮公から御判をいただいて**判形人**といわれた。

判形人とは、藩お墨付きの者ということで**郷士身分**であり、平時には漁に出、いざという時には藩命に従って軍事的活動を行った。

- 大坂の陣の後、元和2年(1616年)五月、至鎮公は志摩守村春、忠村の冥福を祈るとともに、甚五兵衛村重の武功を賞して**森家の本家**として**村重を椿泊**に還住せめ志摩守家の祭祀を継がしめた。
- **判形者**43人の内**村重**に従って**椿泊に留る**ものは留め、**従わない者**は名東郡**津田村**に呼び寄せ、この者に重ねて御判を下されたのが元和2年の御証文である。
- 為堪忍分名東郡之内**津田村**高**百五拾石**宛行之者也
- 元和二年五月廿七日 至鎮 御書印 判形者中
- **椿泊**に留まった者は小林清右衛門、栗田菊右衛門、木内重右衛門の**3人**で残り**40人**は**津田川口番手**として勤めた。
- 高150石を人別に割ると一 人前切田3石7斗5升宛となる。

- 寛永10年、**益田豊後事件**が起こり、寛永15年(1638)、一国一城の制により**海部城は廃城**となり、城下に**郡代役所**が置かれた。
- 寛永17年には**海部の押さえ**として、要所に**番所**を設けた。
- そして、**判形人の内、4人**を**津田の番人**として残し、その他の37人を**下灘由岐**から**穴喰**の間に居住させ、南方を抑え国境を固めることになった。
- そして**判形者**は海部の要所に居住し、**海部代官の支配下**に入った。
- 海部に移住した**判形者**は津田浦と同じように**切田、屋敷、藪**などを賜って住み、**公用**を勤める者は切田の外に**御扶持**御支配をも下された。
- 格式化された判形者はその後御鉄砲から居替えられた者もあって37人が、明治維新の時には**42人**になっていた。

# 判形人の墓

- 判形者はその先祖が森志摩守の家来である。
- 現在海部城山の北の小丘に郡内最大といわれる五輪塔が二基あってその周囲に判形者の墓が群っている。
- 寛永17年 この地に来た24軒の判形者が主人である**亡き森志摩守村春夫妻**を慕って建立した供養塔である。
- 又、奥浦の薬師寺には次の過去帳、位牌が残されている。
- 文禄元(1592)壬辰年六月二日
- **秋月蓮休禅定門** 森志摩守
- 慶長十(1605)乙巳年五月十四日月**海妙薰禅定尼** 同室

# 森志摩守村春夫妻と判形人の墓



# 志摩守判形人供養

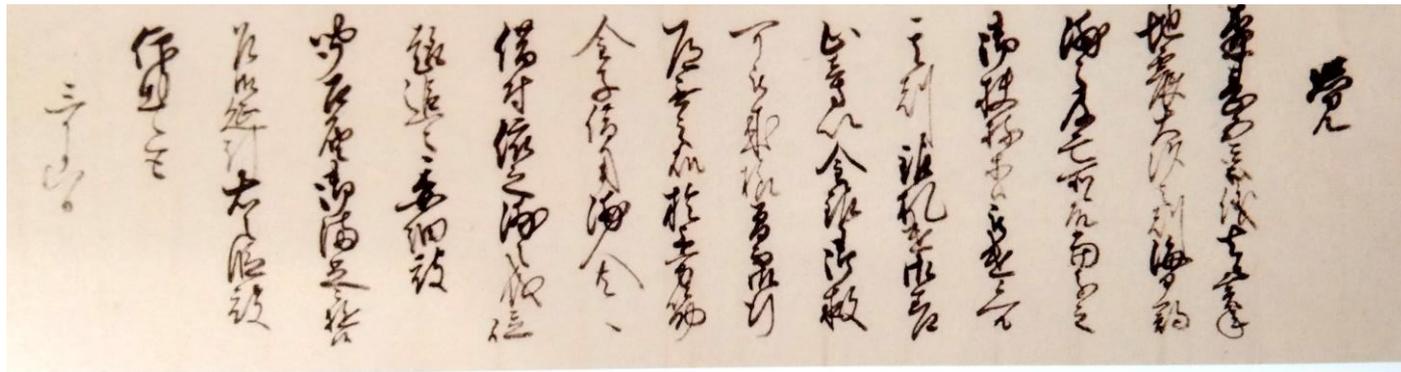


秋月蓮休禪定門(志摩守)と森家判形人の供養が毎年行われている。

# 判形人の子孫 木内家の墓地



# 覚書



- 宝永4年(1707)の**大地震**に伴う大潮で**海部郡**の浦々は大きな**被害**を受けた。**藩**からは浦人の生活支援として**銀札**が与えられたが充分ではなかった。
- 第**7代森甚五兵衛村建**は上方で**借金**をして支援にあたった。
- その行為を褒めたのが本覚書である。甚五兵衛が志摩守の時代から縁の深かった海部郡の人々を支援したと思われる。
- 参勤交代において藩船を漕ぐ**加子**役であった彼らと**甚五兵衛**との関わりは深かった。

# 蜂須賀水軍

- 藩のお抱え水軍となった阿波水軍は、組織の体制化が「更に進み、しだいに徳島藩の職制に組み込まれていく。
- まず、藩にまつわる海上のこと一切を取り仕切る役目を「**海上方**」といい、中老格である**森両家**がこれを世襲した。
- 次に**安宅目付**けであるが、これは与士格より命じられ、定員2名で、安宅御船役所に出勤し、役所内のことを全て行っていた。
- そしてその下には**安宅大工奉行**と**水主奉行**が、それぞれ5名ずつ配置され、彼らは中小姓格から選ばれた。
- **大工奉行**は、御船役所において**造船**等のことを分担し、役所の東側に詰め所があるせいか、東の奉行とも言われていた。
- それに対し、**水主奉行**は役所の西側に勤務し、**水主**に対する全てを管轄しており、西の奉行と呼ばれていた。

- 船頭や船を漕ぐ**水主**、さらには造船技術を有した**船大工**が集められ、江戸前期には徳島藩水軍組織が整備された。
- 水軍の基地は、はじめ**常三島南東部**に置かれていたが、寛永末年に**福島東部**に移転し、同所が**安宅**と呼ばれるようになった。
- この水軍の基地には**100隻**を超える船が収容され、同所で**造船**や**修理**を行うことができた。
- 福島の**四所神社以東**は**水軍が管理・支配**する地域で、町奉行の警察権が及ばない場所だった。
- **船頭**や**水主**らは優遇され、**扶持米**以外に**屋敷地**が与えられた。
- **沖洲**に約170軒も置かれた**水主**の屋敷は、表口5間・奥行15間で**75坪**もの広さだった。
- **船大工**が屋敷を与えられたのは、安宅の南に位置した**大工島**（徳島市大和町）で、江戸時代の絵図によれば**55軒**を数える。

- **甚五兵衛家**が椿泊を本拠とし**安宅役所を統轄**した。
  - 一方、**甚太夫家**は**由良**にあって**淡路**の水軍を管轄し、**長左衛門家**が甚太夫家を**補佐**した。
  - 甚五兵衛家、甚太夫家ともに海上方御用であるが、**甚五兵衛家**が**上席**である。
  - 7代甚五兵衛村建が享保九年(1724)より病気にかかったため、村建の病氣中、由良の甚太夫が主として海上方御用を命じられたことがあった。
- 
- **安宅役所**には**格付御船頭13名・御目見船頭17名・御目見杖突格3名・杖突格67名**がいた。
  - これだけの人員の他に、参勤交代のような大がかりな業務には、**各津浦**から**加子**を動員した。

# 水主と加子

- 「**かこ**」は、船に乗り込む人たちのうち、船頭の指図を受けて船を漕ぐ作業をする人。
- **水主**は、常雇いの漕手で、「**加子**」は漕ぐのに「加わる」との意味で、臨時雇いの漕手である。
- 阿波藩の**海上方**には本家の**森甚五兵衛**と分家の**森甚大夫**があたって軍令軍政を統括した。
- 副役の**船手頭**には**森長左エ門**、**広田加左エ門**、**高木善五郎**（いずれも300石）が据わった。
- その下役には**格付御船頭13名**、**御目見御船頭10名**、**御船頭17名**が最高の地位で、つぎの**御目見杖突格3名**、**杖突格67名**とともに**苗字帯刀**を、許された。
- つぎに**矢倉者（櫓者）42名**、**袴着御水主136名**、**御水主80名**などあって、その**数380名**ほどあった。またその下に阿波、淡路の68浦から召集された**予備水夫の加子が約2000名**近くあった。

# 蜂須賀水軍の全容

- 蜂賀藩の水軍の根拠地としては、御城下**安宅**・那賀郡**椿泊**・淡路**洲本**および **岩屋**の4か所があった。
- **安宅御船屋**は軍艦 を保管し、建造し、修理し、何時でも出航できる様に整備する軍港であって、 **安宅御船屋**の他に、**沖須の八軒船屋**がある。
- **安宅御船屋**には、御船の格納庫が立ち並んで、**使用しない船**はここ納めていた。
- 「**安宅取御船屋見取図**」によると、**大小93棟**の船屋が立ち並んで、その内**大型の家**が**36棟**ある。
- この外、**沖洲御舟屋**には**8連の船屋**が並んでいた。
- これらの御船屋は浜辺に有って全部水面から離れている。使用済の船は、**陸上**にある**船屋**で保管せられて居たことがわかる。

- 安宅の御船屋には、藩主の御座船の**至徳丸**、**飛鷗丸**、**一言丸**、**晴光丸**以下の精鋭が納められていた。
- この外に、**森甚五兵衛**・**森甚太夫**両家の勢力下の**持船**がある。
- 森家は藩主の御召船同様朱塗の乗船**栄光丸**の外に多数の軍船を持って居た。
- **甚五兵衛**の**下屋敷三ツ頭**には、**船屋が17棟**あり、**椿泊**にも多数の**御水師**（御船頭水主）が居た。
- また、淡路の**須本**に2人、**岩屋**に2人の**船頭**が居た。
- また、淡路**御水主**（加子）の者頭10人、淡路江井浦**御船預り**藤川経左衛門の名が、「蜂須賀家無足以下分限帳」に記載せられている。
- 「藩主海お船行列順序』の中に、**須本御船手**乗船が行列の中に加わって居る点から 考えても、**安宅御船役所以外**にも多くの軍船があった事が想像出来る。

(御大典記念阿波藩民政資料上巻」)の内に次の記事がある。

## 阿波守所持船之覚え

関船小早 百七艇 但し十六端帆より三枚帆迄

荷舟 十三艇 但し十五端帆より大端帆迄

右之外於国元用事相調候河船・ヒラダ船・高瀬船其外小船数多有之候

三代以前之阿波守代には十六端帆より十二端帆迄関船六艘

慶安元年子之霜月十四日之夜類火に焼失仕候

(中村美作宅から出火)

領内之材木次第不自由付而其後船数造申儀不罷成

十六端帆之船式艘造申候

藩主の所持関船(軍艦)

- |    |            |                              |     |
|----|------------|------------------------------|-----|
| 1  | <b>至徳丸</b> | 十六端帆 御召船 千石積造り               | 您朱塗 |
| 2  | <b>飛鷗丸</b> | 十六端帆 御召船 千石積造り               | 您朱塗 |
| 3  | <b>一言丸</b> | 十三端帆 <b>御召替船</b> 左右垣立横黒指板金箔  | 您朱塗 |
| 4  | <b>晴光丸</b> | 七端帆千汐の時川御座船                  | 您朱塗 |
| 5  | 龍王丸        | 六端帆 千汐の時川御座船                 | 您朱塗 |
| 6  | 朝晴丸        | 十三(五十挺立) 池田登手船 後二藩主二返上ス      | 您朱塗 |
| 7  | 飛鳥丸        | 十二端帆                         | 您朱塗 |
| 8  | 鸞尾丸        | 十三端帆 御台所船                    | 您朱塗 |
| 9  | <b>順好丸</b> | 十三端帆 <b>御召替船</b> 左右垣立横黒塗指板金箔 | 您朱塗 |
| 10 | <b>飛箭丸</b> | 十三端帆 <b>御召替船</b> 右同断         | 您朱塗 |
| 11 | 沙棠丸        | 十一端帆                         | 素地船 |
| 12 | 栄寿丸        | 十端帆                          | 素地船 |
| 13 | 和光丸        |                              | 素地船 |
| 14 | 大川丸        | 四枚帆 御川御座 森長左衛門支配の伏見川御座       |     |
| 15 | 明光丸        | 四枚帆 同上                       |     |

その他 御道具船、糧食船、御馬船、御駕籠船、胴高船、鯨船、伝馬船など多数

惣御数合 **百三十四隻**

# 森甚五兵衛屋敷

- **森家**は藩主の御召船同様朱塗の乗船**栄光丸**の外に多数の軍船を持って居た。
- **甚五兵衛**の**下屋敷三ツ頭**（新町川と福島川の合流点）には、**船屋**が**拾七棟**あり、碇泊にも多数の御水師(御船頭水主)が居た。
- 「森甚五兵衛福島三ツ頭下屋敷並騎射馬場北手船置場帳」  
右屋敷内之内棟数拾七軒、内二軒瓦葺  
他に十七軒の板屋あり

# 森家船溜まり

- なお森甚五兵衛家は徳島城下（徳島市）に居宅と大坂蔵屋敷（大阪市西國町）を有した。
- 徳島市新蔵町の下屋敷には、数十艘の船を泊めた船だまりがあった。松の植わった土手にその面影を窺うことができる。  
（写真は福島橋南側・新蔵町の森家船だまり）



# 新蔵町と福島町の森家屋敷



# 森甚太夫屋敷跡

- **森甚太夫**は**由良**に居を構えていたが、**下屋敷**は**新蔵町**にあった。其の地には、明治11（1878）年に高知裁判所徳島支庁庁舎が建設されて以降、**徳島地方裁判所**が設置された。
- 近世期は徳島城の外郭にあたる「徳島惣構」を構成する「徳島」の一角に位置した。この「徳島」は、徳島藩蔵や藩の家老・中老・物頭等上級家臣屋敷地によって構成された。
- この地点は、安政年間（1854年～1860年）作製の「御山下島分絵図（徳島）」には、「**新御蔵**」敷地と徳島藩中老**森甚太夫家**、中老武藤左膳家敷地として記載されている。

# 安宅船屋敷の側に甚太夫下屋敷が有った



天保10年の絵図によると、御船屋のすぐ左下、末広新田との間に「**森甚太夫** 下屋舗六反九畝十五歩」「**長坂三郎左衛門** 下屋舗九反四十九歩」「**天文御用屋舗**」との記載がある。  
「天文御用屋舗」は**気象台**として大和町に残っている。

# 地蔵寺と森甚太夫

- 「五番札所**地蔵寺**」ここの寺領は40,000平方メートル（12,000坪）にもおよぶ古刹で、境内に戦国時代、江戸時代に蜂須賀家で阿波水軍を率いたという「**森甚太夫家墓所**」があり、寛文、元文、享保といった時代の古いお墓が並んでいる。



# 海上稽古

- 第9代甚五兵衛村山に**蜂須賀重喜**より、**海上稽古**が命ぜられた。
- 宝暦13年**東海道筋海上稽古**が命じられ、**13段御荷船**で**4月11日**乗船、**6月16日**江戸に着いた。
- 帰りは**陸路**で**6月16日**発足**7月9日**帰邸した。
- 明和4年**中国筋**から**四国表**まで**海上稽古**を仰せ付けられ**6月17日**乗船**長崎**まで航海練習して**8月6日**に帰った。
- **重喜**が隠居して大谷公となった後も度々**椿泊**に來られて**治昭共々甚太夫家**とは**親しかった**ようだ。
- 天明5年、11代村芳の時、**載姫**、同7年**嘉代姫**が**京都へ入興**の節にも大阪までお送りしている。
- また、寛政3年にも**海上稽古**として**藩米積込の廻船**にて**10月2日椿泊**を出て**同21日江戸**に着いている。

# 参考資料

- 木瓜の香り 森甚一郎／著
- 徳島県史 第3巻 徳島県史編さん委員会
- 椿村史
- 阿南市史
- 徳島市史 第6巻 高橋 啓／監修
- 海部町史
- 鳴門市史 前編
- 阿波蜂須賀藩の水軍 団 武雄／著
- 鳴門教育大学研究紀要 20020000
- 阿南市の文化財 阿南市文化財保護審議会／編
- 『広報あなん』ふるさと探訪 湯浅良幸 著